

視覚障害教育のアセスメントとエビデンスに基づいた手立てを 広範な特別支援教育に生かしていくために

適切なアセスメントと介入による方法を特別支援教育に生かしていくための指針と現状の問題点について

○ 刀禰 豊

（岡山県立岡山東支援学校）

KEY WORDS: 特別支援教育、視覚障害教育におけるアセスメントと手立て、適切なアセスメントと手立て

（目的）

視覚障害教育において、個々の児童生徒が抱えている障害に適切な手立てを取るためには、「見え方」について多様な方法でアセスメントを行い、個々の状況を明らかにして対応していくことが大切である。AFBの「拡張されたコア・カリキュラム」の事項を見ると、具体的な事例に則して多様な活動のあり方が詳細に紹介されている。支援の際の具体的な場面を視覚・視機能に関する手立てが行われることで、より実態に即した取り組みが可能となってくると思われる。日々の実践で個のニーズにあった実践はなされてきていることは多いと考えられるが、そのための方向性を示した指針は明確なものとはどりにくい。準じた教育（普通教育の）、下学年対応の教育、知的障害教育（重複障害）に対応した教育など多様な教育課程があるが、さらに盲学校等の特別支援学校以外の通常教育における在籍児童生徒への対応も必要である。多様な視覚に支援を必要とする児童生徒に対応するためには、個をどのように把握し、視覚障害教育のフィールドで生かしていくかを、個々の状況の把握とともに考えていくことが重要となってくる。

（方法）

AFBのECCに記述されたカリキュラムの検討をもとにわが国の視覚障害教育に関する実践の状況をいくつかの実例に触れつつ検討や評価を行い、多様な状況で有益な方法論の検討を思考する。わが国の視覚障害教育におけるアセスメントとその結果を生かした指導、実情に応じた適切な支援などの状況を比較することで、問題となる多様な観点を整理し、わが国の項目との比較検討し、実践の状況との比較、従来の方向性の比較などで、有効な視覚障害教育について整理、活用していく項目についての内容について探っていく。また、個々の能力のパフォーマンスを作業学習などの形式に当てはめる指導方法の問題点も明らかにし、真に個々のパフォーマンスを伸ばす視覚障害教育の特質の広範な特別支援教育への適応の可能性も考えていく。

（結果）

視覚に関して多様なアセスメントを行うことで、視覚・視機能の適切な能力の把握ができることで、多様な学習における適切な支援が可能となってくる。見え方に関して、具体的なデータを個々に作成し、ファイリングすることで、より実態に即した支援のあり方が可能となる。

「拡張されたコア・カリキュラム」に示された条項の分析によって、詳細な記述の中で、実際の指導の中での有益な事項の例示が多くなされている。多様な指導に関連した項目を詳細に記述することは、有効な事実を体系的に意味づけていくことになり、異なる場面での多様な指導を効果の面など有機的に結びつけ、一体のプログラム化した総体として考えていくことが必要である。個々の児童生徒に多様な視機能を把握できる検査等によって把握できた個々のデータを生かし、経験的な指導の積み重ねを指導のリストなどにまとめることで、有効な支援の方法を体系化することができる。「拡張されたコア・カリキュラム」においては、個々の指導事項につい

て個別に記述している事例を考えると、現状において多様な支援を必要とする教育的ニーズの必要となってきた事例も多い。文字の読み取り困難を有する児童生徒に対してWAVESや読み書き障害を調べる検査を相乗的に使い、個々の支援を視覚障害教育の見地からも加えていくことも可能である。

「拡張されたコア・カリキュラム」の方向性は、多様な視覚障害教育のなすべき領域の中で、個のニーズに応じた教育ガイドラインのひとつの形とも言えるものである。視覚障害教育にとどまらず、体系化されたアセスメントやそれに応じた評価が定式化されているアメリカの方向性と具体的な支援を結び付け限定的に評価しようとする特別支援教育現場での評価のあり方を再考する観点で見るべきものは多い。多様な特徴を明確に捉えていくことで見えてくることが多い。このように、視覚障害教育において示された国内外の知見を分析することで、多様な児童生徒の状況に応じた適切な支援を目指していることがわかる。発達障害など多様な実態に即応する側面にも対応した要素にも対応するため、個のアセスメントの情報に配慮することも必要である。

（考察）

視覚障害教育において、視覚・視機能に問題を持つ児童生徒への包括的な支援を行うことが大切である。多様な視覚の機能面での支援のニーズに対応していくために、広く視覚について広範な事象に対応した手立てが可能な教育の方向性を示していく必要がある。アメリカの「拡張されたコア・カリキュラム」等にもみられる教育・支援・介入のあり方は多くの示唆と可能性を持つものである。重複教育課程を含めて今、視覚に関する支援を必要とする支援の領域は拡大してきている。従来の視覚障害教育に加え、発達障害や知的障害の児童生徒の視覚に関する支援、肢体不自由や重複障害児童生徒で見えにくさや視覚に関する機能の支援を必要とする事例など多様になってきている。その面で考えても、視覚障害教育において個の指導の中で得られてきた知見と方向性は「見る」という機能の支援の意味で中核と考えるべきであろう。可能な手立てを多様な教育の場で提供することは視覚に起因する多様なニーズに応じた有効な手立てとなるはずである。発達障害や知的障害など多様な場面で個々のニーズに応じた支援を積み重ねていくことで視覚障害教育を視覚・視機能関連の支援のためのニーズ教育への飛躍も可能であると考えられる。

（文献）

「視覚障害教育」における、教科教育の実践上の問題に対する効果的な（指導法）の創造、事実に基づいた方策に立脚した実証的な対処についての考察並びにガイドラインの策定にむけて」第50回特殊教育学会プログラム・発表論文集

「発達障害との関連で視覚障害児・者について実行的な視覚障害児・者について実行的な視覚障害ガイドラインの検討に向けて」第49回「日本発達障害学会研究大会発表論文集」

Ecc Essentials (AFB, 2014)

(YUTAKA Tone)